

往生極樂の意義

「おのおの十余か国のさかいをこえて、身命をかえりみずして、たずねきたらしめたもう御こころざし、ひとえに往生極樂のみちをといきかんがためなり。」

極樂

極樂といえどもちろん、阿弥陀仏の国土のことではありますが、(1)極樂、の外に、(2)浄土、(3)安養界、(4)無量光明土、(5)寂靜無為の樂、等の言葉で表現されてあります。極樂とは安樂な世界、浄土とは清浄なる世界、安養界とは安らかな世界、光明土とは明るい世界、寂靜無為の樂とは静かな世界であります。

そこで極樂の樂でありますが、一体仏教で眞実の樂とは何を意味するのでありましようか。これについては聖人が眞仏土卷に引かれた、『大般涅槃經』にその答を求めましょう。

『大般涅槃經』に曰く、

「善男子よ、大樂がある、故に大涅槃と名づける。涅槃は無樂である。四樂を以ての故に大涅槃と名づける。何をもつて四つとするか。」

第一には、諸の樂を断ずるが故である。樂を断ぜざる者は、即ち名づけて苦とする。もし苦ある者は大樂とは名づけない。樂を断ずるが故に苦も亦ないのである。無苦無樂を即ち大樂と名づけるのである。涅槃の性は無苦無樂である。この故に涅槃を名づけて大樂というのである。苦樂を超えた大樂の義をもつての故に大涅槃というのである。

また次に善男子よ、樂に二種類ある。一は凡夫の樂であり、二には諸仏の樂である。凡夫の樂は無常敗壞である。無常でこわれるから無樂である。諸仏は常樂である。変易あることがないから大樂となづける。

復つぎに善男子よ、三種の受がある。一には苦受、二には樂受、三には不苦不樂受である。不苦不樂(凡夫の)これまた苦である。涅槃も不苦不樂におなじけれど、しかも大樂となづける。大樂をもつての故に大涅槃となづける。

第二には、大寂靜のゆえに名づけて大樂とするのである。涅槃の性は大寂靜である。何をもつてかといえれば一切の潰閑(けいげん)(みだれそうぞうしいこと)の法を遠離するが故である。大寂をもつての故に大涅槃と名づける。

第三は、一切智の故に名づけて大樂とする。一切智でなかったならば大樂とは名づけない。諸仏如来は一切智の故に名づけて大樂とするのである。大樂をもつての故に大涅槃と名づける。

第四には、身不壞の故に名づけて大樂となす。身がもし壞れるならば大樂とは名づけない。如来の身は金剛であつて壞れることがない。煩惱の身、無常の身ではない。故に大樂と名づける。大樂をもつての故に大涅槃となづけるのである。」

無苦無樂

以上の御文によると、涅槃が大樂といわれるのに四つの理由がある。即ち

- 一、無苦無樂
- 二、大寂靜
- 三、一切智
- 四、金剛不壞

第一の無苦無樂であります。凡夫は苦と対立する樂を好ましいものとして執着する。ところが樂には必ず苦が伴なわれている。否、「苦の新たなるものを樂と考えている」のでありますから、生死の迷界にあつては、苦樂は一如であつて、樂になりきることが出来ない。そこで涅槃では「樂を斷ずる。」、樂を斷ずるが故に苦を斷ずるのであります。苦樂を斷じた境地が大涅槃ではあるが、それは凡夫の不苦不樂と同一ではない。凡夫の苦樂とは徹頭徹尾、本能的感覺的な満足不満足の世界に於いては、苦樂でも不苦不樂でも、本質的には苦惱の一色彩にすぎません。涅槃はもつと高次的な世界であつて、凡夫相對の苦樂を超えた、絶対の至境であつて即ち大樂であります。地上に於ける大法の生活者の持つ法悦は、その源を一如に發し、この涅槃とその本質を同じうします。道はその究極に於いては真の大樂と一致すべきものであります。

大寂靜

第二に涅槃は大寂靜であるから大樂だというのであります。即ち一切の潰鬧けいごうから遠くはなれている。乱れ騒々しい生死の動乱をはなれて、絶対の靜境であります。だから極樂のことを寂靜無為の樂と言われます。大乘仏教では禪定だとか、大寂靜だとか、この靜処を得ることが問題となります。靜中靜を求めるのでなくて、動中の靜を生きているのであります。はてしなく寄せてはかえす生死動亂の故に昏惑される凡夫の迷いから解脱して、不動の寂靜に住するということ、そこにこそ一切の中に汲めども尽きぬ大樂が湧き出でます。

一切智

第三は一切智であります。一切智は仏智であります。即ち智慧であります。智慧は光明であつて、いやしくも仏教を口にする以上、智慧を問題にせずしては仏教そのものがありません。智慧なくしては、諸仏も弥陀も釈尊も、淨土も、道も、救済も、転迷開悟も、全てがありません。仏教とは「智慧」の二文字にすぎないと言つても過言ではありません。

智慧は光明である。だから聖人に従えば極樂とは無量光明土である。天親菩薩にあつては仏は尽十方無碍光如来である。「無碍の光明とは大慈悲」である。「この光明は即ち諸仏の智」である。親鸞聖人は真仏土の巻に

「謹んで真仏土を案ずるに、仏は則ちこれ不可思議光如来なり。土はまた無量光明土なり、然ればすなわち大悲の誓願に酬報するが故に真の報仏土なり。」

と言ひ、淨土は、第十二願光明無量の願、第十三願壽命無量の願によつて成就される無量光明土なることを明らかにされました。

凡夫の無明に大樂があるのでなくて、この智慧光こそ大樂それ自身であることを明かしたのであります。

金剛不壞

第四には、大涅槃は金剛不壞であります。生死界が無常であり、罪濁に汚れておるに對して、涅槃界は常住であり、清淨であります。涅槃は煩惱の身もなく、無常の身でもなく、如来は金剛にして破壊なきが故に大樂であります。

以上で極樂の樂とは何であるかをほぼ知ることが出来ました。浄土はかかる涅槃をその本質とするのであります。

往生思想の純化

単なる概念の世界から出て、信仰問題が我らの真剣な願求となつて来た時、前述の如く極樂と往生とは離すことの出来ない関係になつて来ます。単なる極樂もなく、単なる往生もない。極樂は理想の彼岸であり、生死は痛ましき現実であります。彼岸なくしては現実を感じずとも出来ず、現実なくしては彼岸はその意味を持ちませぬ。理想の彼岸と生死の現実との間、そこに横たわる問題が信仰問題であると言つていいと思います。

彼岸に往生したい……その私たちの願生の心の底には随分と不純な心が雜ります。その不純な心をどうして純化するか、そこに過去の聖者たちのそれぞれの苦心があつたのではないかと思われれます。親鸞聖人の偉大は、この往生心を最純化して、清₃淨真實なる大信の世界を端的に生きられたところにあると思います。

廻向の宗教

いつたい如来の本願と衆生の信心とは如何なる関係を有するか、それは仏教徒の長い間の問題であつたと言つていい。往生を願う凡夫の心と、十方衆生を救わんと誓つた法蔵の本願とは、必ず相応しなくてはならない。しからは真實なる如来の本願に如何にして相応するか。仏教徒はこの問題を掲げて長い問苦しんで来たのであります。もしこの問題に對して明確な答がない限り、我らは決して救われませぬ。

しかるに聖人はここにこの問題に對して明確な断案を下されました。「廻向の宗教」がそれであります。我々は久遠の我執に引きまわされて断惑証理と哲学的な思维の野にさまよつたり、廢悪修善と相対的な善惡の始末によつて、聖なる絶対価値を創造しようとしたり、この定散の自力によつてござかしくも彼岸に自己を高めようとやつれる。しかし、それは結局竿によつて星を落そうとする猿の浅智慧にすぎなかつたのであります。

聞くという機縁にふれて、我らの心中奥深く巣くう疑惑の晴れゆく所、そこに他力の信心は廻向せられる。しかも、この願生心こそ、如来の本願力そのままの廻向であり、顕現であります。凡夫の汚れた迷心から金剛不壞の仏身を創造^{つくりあげ}するのではなくて、金剛不壞の如来こそ、大悲のみ手をのばして、善惡ありのままを撰取するのであります。されば衆生の信心は如来の本願と一体である。「大信心は仏性なり。仏性

即ち如来なり。」南無と帰命する信こそは、阿弥陀仏と助ける法と一体でありました。されば凡夫の我執にとどめをさして

「この虚仮雑毒の善をもつて、無量光明土に生ぜん」と欲するは、これかならず不可なり。」と仰せられました。称名を励もうと、くつろぎ心を出そうと、よろこび心を弄ぼうと、本気になろうと、精進しやうと、一切の善、一切のはからい、それらのすべてが一度鋭い批判の前におかれた時、浄土への行としてはことごとく「急作急修して、頭燃をはらふがごとくすれども、すべて雑毒雑修の善となづく、また虚仮諂偽の行となづけ」られるのであります。

我らが、我らのけがれた心で造りかためたものを如来にさしむけて、如来の願心によびさすのではない。凡夫の行を如来の行に一致させるのではない。如来の名号を聞くことによつて、行も信も如来そのものの救済意志のままが衆生の上に成就されてゆきます。

されば信巻には

「しかればもしは行、もしは信、一事として阿弥陀如来の清浄願心の廻向成就したまふところに非ざることなし。」

と喝破せられました。ここに新らしく宗教文化の上に宗教的真理の真髓をつかんで千古の大問題に根本的解決を与えて下さったのであります。

罪福を信ずる心

しかしながら聖人が純粹なる大信に生きられたということは、私どもの問題が解決されたわけではありません。我らが往生浄土を願う心には随分と不純なものが混じります。本気になつたようでも、「罪福を信ずる心を以つて本願力を願求す。是を自力の専心と名づくるなり。」善いことをすれば善い報いがあり、悪いことをすれば禍が報いられるという心が、如来を疑つた罪福信ずる心であります。この功利的な心、幸福一つを求める心で本願力をつかもうとする心、この心が自力の心であります。この仏智について根本的な疑惑を持ちつつも、自分の欲心に立ち上つて如来をつかもうとする自力から容易に出ることが出来ないが故に、絶対無碍の大信海に往生することが出来ないであります。

この罪福を信ずる功利的な心のまじわる不純な心の宗教人の前に現れるものが「方便化身」であります。方便化身土では仏法僧の三宝を見ません。智慧光も大慈悲も働かない、美しい牢獄であります。王の太子が王に罪せられて金の鎖をもつて王宮につながれたような世界だと聖人は仰せられました。多くの求道者は、甘美な陶醉境、美しい化城に腰かけて、真実の如来の招喚のみ声を忘れていきます。招喚のない世界には、不退転の歩みも、一切を背負つて立ち上る強さも、「罪悪も業報も感ずること能はざる」無碍の境地などあるはずがありません。関東の同行たちもおそらくこうした世界に彷徨うていたのでありましょう。

往生浄土の真意義

こうした不純な願生心と、それに応じて現われる化身土を超えて、純なる願生の大
道に合掌して、真仏土を開放して下さったのが聖人であった。聖人にあつては、浄土
に往生することは、すぐ大般涅槃の証を開かせてもらうことであり、真如法性の身を
得証することであり、浄土とは全く涅槃界でありました。涅槃界は、生でもなく死で
もなく、苦でもなく楽でもなく、一切の差別を超えたる自然の報土であります。です
から大経には「虚無の身、無極の体」と言い、「無為泥洹ないおんの道に次ちかし」と言い、天親菩
薩は「第一義諦妙境界」と言い、善導大師は「極楽無為涅槃界」と言い、法然上人は
「寂靜無為の樂」と言われたのであります。それらはすべて凡夫の、樂がしたいとか、
地獄に行つて苦しみたくなひとか、修養がしたいとか、安心立命がほしいとか、死に
たくないとか等々の、「ため」に表わされた化身土でなくて、一切のはからいを超え、
一切の毒を純化したる大信大行の前に実在する、仏の願力によつて莊嚴成就され
る、涅槃界そのものであります。聖人は和讃に

「信は願より生ずれば 念仏成仏自然なり

自然はすなはち報土なり 証大涅槃うたがはず」

と又

「如来はすなはち涅槃なり 涅槃を仏性となづけたり

凡地にしてはさとられず 安養にいたりて証すべし」

といい、又

「安養浄土の莊嚴は 唯仏興仏の知見なり

究竟せること虚空にして 広大にして辺際なし」

と説いていられます。即ち浄土は、我々の現実の世界と同一次元にたつ美しい世界で
はなくて、もつと高次のな善悪浄穢なき絶対価値の世界であります。唯仏与仏の知見
とは、ただ仏を知る者は、仏の智慧であるということであり、凡夫無明の心はた
だ生死の穢土のみを感じます。仏心のみよく浄土を觀じます。仏心が仏土を見る。
それが即ち真仏土であつて涅槃界であります。

浄土は、仏と、仏国土と、菩薩との三種莊嚴であります。美しい世界に違いありま
せん。しかし美しき莊嚴にのみかたよつてしまえば、浄土は低級な世界となります。
ただ美しきが故に浄土ではありません。もし美しい諸相が如来であれば、轉輪聖王も
また如来であります。如来は莊嚴の相だけで見てはなりません。大般涅槃の第一義
諦であるが故に如来であります。即ち「真実智慧無為法身」の無相の相こそ如来及び
浄土の本質であります。もしこの涅槃を忘れて、浄土の美しい莊嚴のみを功利心の対
象として描くならば、それは化身土であつて真仏土ではありません。

何を求め何を与えられたか

今や聖人は、一切の邪偽、聖道、方便權仮の小路を出でて、純粹無雜な如来願力、南
無阿弥陀仏の聖火に純一に燃えきつていられます。關東の同行はかかる聖人にぶつ
かつたのであります。彼等は惑乱している。それだけ真劍である。十余ヶ国の境を
越えて、はるばる聖人のお膝元に来て、何を聞き、何を求め、何を得んとしたか。む

ずかしい学問か、あるいはめづらしい法門か。しかして聖人は何を与えられたか、何を説かれたか。私どもは聖人のみ言葉を聞かねばなりません。

「しかるに念仏よりほかに往生の道をも存知し、また法文等をもしりたるらんとこのころにくゝおぼしめしておはしましてはんべらんは、おほきなるあやまりなり。もししからば、南都北嶺にもゆゝしき学生たち、おほく座せられてさふらふなれば、かの人々にもあひたてまつりて往生の要よくゝきかるべきなり。」

「しかるに念仏より外に……」との聖人の端的な信の告白は、関東の同行に対する実に晴天の霹靂であつたに相違ありません。おん身たちが、親鸞に向かつて、念仏より外に往生の道をも存知し、難しい法文などをも知っているだろうと、心憎く思うなれば、それは大いなるあやまりである。実にはつきりとした断案であります。

全一なる聖火

善人でも悪人でも、智者でも愚者でも、ありのままが南無阿弥陀仏一つによつて救われてゆく、この不可思議の念仏より外に、愚禿にとつて生きる道はないのである。その外に秘密もなければ、駆け引きもない。聖人は偉大でありました。だがそれは単に学問を冷たく弄ぶ人ではなかつた。南無阿弥陀仏は聖人になりきり、仏凡一体の境地に住し、金剛不壊の大信心に生ききられていられました。信仰は冷たい議論ではない。知よりも深い情意の世界に眞実生きてはたらく事実である。生活である。

一見、現象の世界は複雑であり、妄念の波は千々にくだける。しかし複雑が複雑で何らの統一がないならば、それは迷える者の相である。迷いは複雑にもつれた心の中にのみある。されば単純、純一なる価値観を持たない者は迷います。聖人にあつては、ただ南無阿弥陀仏のみ唯一の価値であり、生命であつた。眞も善も美もそれらの全ての価値は、ただ如来の内にも統一体験せられる。燃える火の中には、竹をなげ入れようと、木を折りくべようと、火はただ単一に燃えてゆく。聖人の中に燃える唯一の火こそ念仏でありました。

学と聖人

もししからば南都北嶺（奈良と叡山のこと）にもゆゝしき学生たち多くおはするから、そこで往生の要をよくよく聞けとの仰せを聞けば、聖人は学問を排斥し、無視していられるようである。果してそうであつたであろうか。聖人は決して学問を頭から棄てられたのではない。また学問に反して勝手な独断をかためられたのでもない。時代がゆるす正しい学問を排斥せねば成り立たないような盲信でもなく、また単なる感情の陶醉でもない。仏教には偉大な哲学がある。八万四千の法文がある。幾千万巻の經典や、深広の釈がある。それを読破し、それを消化し、それを我がものにすればするだけ、そこに眞に開いて来るのは唯「念仏」の世界である。聖人はこれをこそ学問と言われたのであります。

「学問せば、いよいよ如来の御本意をしり、悲願の広大のむねをも存知して、いやしからん身にて往生はいかゞなんどあやぶまん人にも、本願には善悪浄穢なきおもむきをとぎきかせられさふらはゞこそ、学生のかひにてもさふらはめ。」

これは聖人の学問観であります。学問する者は学を超えて如来に帰すべきである。名利のための学や、弄ぶための学ではなくて、本質的に正しく強く生かされてゆくための学である。聖人は、論理を無視されたのではなくて、論理を超えられたのであります。学問に反かれたのではなくて、学問を超えられたのであります。

凡聖の一切のはからいは、決して宗教的絶対境に到達する方途ではなかつたのです。華かにして雄大なる華嚴経も、幽玄にして遠大なる涅槃経も、それらはすべて人間のこざかしい技巧の世界ではなくて、唯一絶対の如来の輝きであり、仏の内的風光にすぎない。美しいもの、尊いもの、聖いもの、崇いもの、真実、清浄、等々の名は、一切如来へと返されてゆくべきでありました。

人間のこざかしいはからいの世界に、美しいもの、尊いもの、聖いもの、崇いものが技巧されてゆくのではなくて、南無阿弥陀仏の中に法爾自然に内具されてあるものであります。一切の功利的なはからいがすたつて、南無阿弥陀仏を頂戴してゆくところ、そこに純一念仏の世界が開かれます。

愚かなる者は常に、目新しいもの、奇抜なもの、非凡なものと選んでは、やがてそれを平凡化して棄ててゆきます。聖人の示された道は平凡である。平凡必ずしも浅いとは言えない。南無阿弥陀仏はわずかに六字にすぎない。口に称えればただの一句、しかもそれを全身全霊の上に生かしきることによつて聖人は、古今独歩、絶⁷対他力、純粹無雜、宗教生活の最究極の聖地にまで到達されました。

大聖釈尊の上にあつたものも、雑多に並べられた学問ではなくして、唯一の法身の成就であり、全一なる絶対価値、涅槃のさとりでありました。そうして五濁悪世の凡夫としての自覚に立つて、広汎なる大乘仏教をながめる時、大聖の真言はついに我らをして阿弥陀仏のお名告りの世界に導きたもうにすぎなかつたのであります。

無碍の道味

関東の同行たちは、すでに関東において、慈信坊善鸞師によつて「わが聞きたる法文こそまことにてはあれ、日頃の念仏は皆いたづらごとなり。」と聞かされて迷える人たちでありました。今聖人の「しかるに念仏より外に往生のみちをも存知し……」のみ言葉はそれとなく、この善鸞師の言草に対せられたお言葉と拝せられます。

こともあろうに親の歩んできた世界が、そして親が全生命を打ち込んだ正しい道が、我が実子によつてかき乱されるといふこと、親にとつてこれほどの苦しいことがあります。大法のため、師教のためには、獅子王の如く強く生ききられた聖人であります。

「仏法をば破る人なし、仏法者の破るにたとへたるには、獅子身中の虫の獅子をくらふが如し。」

と御消息にありますが、獅子身中の虫が我が肉身の子でありました。聖人は訴える所なき最も辛い苦杯を持たれたわけであります。

しかし私どもは、ここにも聖人の南無阿弥陀仏の大信より自然に生れた無碍の道味をうかがうことが出来ます。

「慈信坊がやう／＼に申し候ふなるによりて、人々も御心共の様々にならせたまひ候ふ由承り候、返す／＼不便のことに候。」

不便のことに違いない。しかしその次には、

「ともかくも仏天の御計に任せまひらせさせたまふべし。」

何もかも人間の努力の彼方に、仏の御はからいを認めて、あるがままに安住していただける聖人を見ます。さらにそうした忍従の態度はもつと鮮かに

「それも日ごろ人々の信の定まらず候ひけることのあらはれてきこえ候、かへすがえす不便に候ひけり。慈信坊が申すことによりて人々の日頃の信のたじろぎあうて在しまし候ふも、詮ずる所は人々の信心の真実ならぬことのあらはれて候。よきことに候。」

人々の信心は試された。一陣の風にすら、散るべきものは散つてゆく。生死の一大事、隠すことも出来ねば、ゴマ化すことも出来ません。悲惨な試練はなめる人にとつては苦い。しかし苦い薬が病気を治す。「よきことにて候」と仰せられる聖人の信境、如何なる時、如何なる場合にも、深い全きものに統融された、無碍の道味を讃嘆せずにはいられません。

「念仏一つ」と打ち出された往生極樂の道は、あるがままの現実の中、如何なる業道8によつてもつれた場面の中にも、横たわっています。しよせん往生極樂の道は「念仏より外に」はなかつたのであります。念仏こそは如来によつて廻向せられた愚禿の生命でありました。